

中国からの女性客を優先して回してもらえるなんて、嬉しい限りだが、それでは従業員としての仕事は捗らない。だが社長の行為を断るわけにもいかずに珍光年は、

「ありがとうございます。がんばりますよ。」

と元気よく即答した。

陸上自衛隊の春日駐屯地の地下で講義をする元海教官の話に戻ろう。

「・・・という事で防衛大臣の腰野カルコは辞任することになった。という事例は君達は小さい子供の頃の話だから知らないと思うが。その盗撮ビデオは情報第三部で鑑賞した後に、業者に出品させた。情報第三部の名前で出品することなど、ありえる話ではない。又、その業者も陸上自衛隊春日学校の情報心理戦対防護必須課程を修了した隊員が作っているアダルト専門の会社から出品する。

収益は陸自で取るわけではなく、春日学校出身の隊員が運営しているアダルト会社の収入になるよ。

防衛女大臣の腰野カルコは無料で出演、中国の従業員青年も無料出演だ。彼らは性器を露出させているしな。時君、何か質問があるか?」

と元海教官は流太郎に質問を振り向けた。流太郎は考えて、

「それにしても凄い話ですね。それでは僕らも、こういう事をしな

いといけないんですか。」

元海教官は静かな笑顔で、

「なーに。ここまで高度な事は、しなくてよい。盗撮機器の操作も実習の必要は、あるから。君達には、もっと簡単なことをしてもらおう。国会議員の暗殺の手伝いとかも頼むかもしれんな。ま、冗談と今は受け取っておいてくれ。

腰野カルコが知りうる自衛隊の情報は大したものではないが、工作員に入手されていいというものでもない。国会議員の中にも他国へ情報を流す輩、それは男女を問わず、いる。愚民が選ぶ政治屋だ。金さえもらえば他国に国家の機密は、どんどん流しているのも、いるからな。

特に中国から大金を貰って、せっせと情報を流す政治屋は国会議員に限らず、都、府、道、県会議員、市会議員の中にも、いるのだ。それらの輩を暗殺せねばならない、と思わんかね、本池クン。」

と今度は釣次郎に質問が飛ばされた。釣次郎は、

「ええ、まあ、思いますが。まるで小説か映画のような話ですね。」

と答えると元海教官は、

「うむ。そうだなー。でも実際に行ったとしても国防の為だ。売国議員は抹消する必要は、あるよ。これらの調査は情報本部第三部で、おこなっていると少し記憶しておいて外では話さないようにしても

らいたい。という事で、君達への指令は自衛隊情報本部第三部から来ることもあるし、参謀本部から来ることもある。ま、この陸上自衛隊参謀本部も自衛隊の組織図には載せられていないが、実は、この参謀本部が陸上自衛隊の最上部組織なのだ。統合幕僚監部の上に位置した自衛隊の最高機関なのだね。これは政治屋も国民も知る必要は、ないし自衛隊の機密の一つだからだ。

君達も、この機密は守るように。外の人間に話さないように。

まず君達に課せられた任務は女体一号作戦、と名付けられている。それと君達にはコードネームが与えられる予定だ。」

釣次郎は思わず、

「コードネームって、なんですか。」

と訊いてしまった。元海教官は、

「おほん。(と咳払いして)こちらが質問をしていいと時間を取らない限り、質問や意見は言わないように。」

と厳重な注意をした。釣次郎は、

「すみません。気を付けます。」

元海教官は、

「よろしい。君達には諜報活動の手伝いをしてもらうのだ。そこから考えても分かりそうな用語だな。時君のコードネームは海、本池クンのコードネームは空である。覚えられないと思うし、ノートに書いておくといい。で、だね。ノートにはコードネームなどと書か

ずに飲み屋のツケに使う名前と書いてくれ。

このコードネームを使う事に君達は、なる。軍事作戦には大なり小なり暗号は必要だ。昭和の日本の海軍は何故完敗したか。それは暗号をすべてアメリカに解読されたからだ。最後の方は薩摩弁を暗号にして、それもアメリカに解読され、昭和の海軍の行動は筒抜けで知られていたのだよ。

ぽっぽーや、海軍の哀れな最後は暗号にある。ぽっぽーや、とは薩摩っぽ、という軽蔑用語から取られている。薩摩が日本のどの地方かは知っていると思うが、知らなくても調べたまえ。」

流太郎と釣次郎は電子ノートに自分たちのコードネームを書き付けた。この電子ノートは元海教官の授業に際して二人に手渡されたもので自衛隊特製のモノだ。自衛隊というより情報第三部で使われている。電子書籍を読むためのタブレット型の機器に似ているが、電源を入れて起動すると人差し指で字が書ける。人差し指の大きさに線を描くことにはならず、ボールペンで書く字の大きさになる。ひらがなから漢字への文字変換機能もあり、漁師だった釣次郎には使い勝手が良かった。

コードネームも貰って、いよいよ、これから諜報員として活動できるのだと思うと釣次郎と流太郎の胸は気球が空に昇るような期待で膨らんだ。

休憩をはさんで、次の授業では中国の工作員の見分け方をスライ

ド写真を黒板に投影しての解説を元海教官が、おこなう。

「いずれにしても、これという人相があるわけではない。しかし工作員の顔は一般中国人とは違うので見抜くのに早く慣れてもらいたい。」

元海教官は教卓から眼鏡を取り出して、二人に見せる。

「実はね、この眼鏡を掛けると中国の工作員は即座に見分けられるんだ。レンズに仕掛けがあることは、あるんだが何ととってもマイクロコンピューターが内蔵されていて、そのコンピューターが対象人物を工作員かどうか、判断する。

決定的な事には、この眼鏡から出るごく微弱な電波によって対象人物の脳内を検査し、調べて工作員であるという記憶も調べるんだ。だから間違いなく確定できるよ。」

流太郎と釣次郎は絶句した。

信じられない話だからだ。こんな凄いものを日本で開発したのだろうか。しばらく前に地元の陽元に住む霧沢金之介は異母弟の黒沢金雄に会うために地球に、やってきた。

黒沢の自宅で兄の霧沢は、

「日本の自衛隊にも新兵器は必要だが、大きな戦争もないから緊急の要件ではないと思う。しかし中国の工作員とかは要注意だね。スパイでなければ逮捕も出来ないが、だからこそその警戒は必要だと思う。この中国の工作員を見分ける眼鏡を、この前、遊び半分で作っ

たが成功した。

おまえに上げるから自衛隊に提供して利益を上げろよ。」

と兄らしく語ったのだ。

元海教官は流太郎に、

「なにか質問があるか。」

と面白そうに聞いたので、流太郎は、

「その眼鏡はサイバーモーメントの発明じゃないかと思いますが。」

と答えると元海教官は、ほお、という顔をして、

「よく知っているな。その通りだよ。つい最近、完成したらしい。サイバーモーメントの製品は、これからも自衛隊で採用予定のものが多数ある。なんとも超科学というか、こんなものを地球人が作れるのかというものが多いらしいなー。て、君はサイバーモーメントと関係した事があるのか。」

「ええ、サイバーモーメントの社長は知っていますよ。」

「そうか。それなら・・・君を通じて自衛隊もサイバーモーメントに要望を出せるだろう。ま、この驚愕的な眼鏡は君達に支給されるし、それでも自分の目で中国の工作員を見抜けるように、なって欲しい。」

三月になって暖かく、暖房もしていない教室だが、時折、少し寒い

空気が地下とはいえ窓から入ってくる。

驚異で脅威の眼鏡の存在を知った二人は心強い気持ちになった。

情報心理戦防護必須課程に準じた教育が元海一佐によって、時と本池に続けて、おこなわれていった。

元海教官曰く、

「情報戦は実戦よりも多大な影響を対峙した国に与えることが出来る。攻撃は最大の防御とは広く知られた言葉だ。武力による攻撃を上回れる場合がある。これは「ペンが剣よりも強し」としても知られている。陸上自衛隊春日学校では情報心理戦攻撃過程も加えられている。防御の後に攻撃か、攻撃の後に防御か、というのは、それで一つの論題ともなるわけだが、専守防衛というオカマじみた見せかけを取らなければいけなかった日本の自衛隊としては防御の後に攻撃の路線ではあるが、それは実戦部隊の話で、我々情報三部、そして参謀本部からの指令では攻撃が先になることもある。要は武器による攻撃ではないからな。

それで情報心理戦における攻撃を君達にも学んでもらう。ボクシングでも防御しかしていないと、どうなると思う、本池くん。」

「いつかロックアウトされますよ、間違いなく。」

「その通りだ。日本の自衛隊は同盟国アメリカ軍の後方から、ついていく行動となっていた。だが情報第三部は違う。攻撃のための攻撃も、おこなう。」

参謀本部も原則的に統合幕僚監部には口出しを平時では、しない。
日本は古い過去に軍隊の経営を間違った。直接的には頭の悪い人間しか海軍に行かなくなった。それが第二次世界大戦の日本の結果となった。それは、そのころにあった制度にも問題がある。御前会議というやつだな。実はね、帝国陸軍でも、これは御荷物というか必要ないものであるばかりか御前が意見もしたし、命令もしたりしたので皇道派以外は、ため息が出るものだったのだ。

それでだね、英才ではあったが皇道派に近い石原莞爾を二二六事件の反乱部隊の鎮圧に派遣させている。石原が反乱部隊に殺される可能性もあることを分かった上でだ。

最終的には石原は左遷、そして予備役へと引退していく。これも当時の陸軍に反発したためである。

そして中国への戦争を長引かせることは陸軍の意思では、なかった。公家上がりの近衛首相ら政治屋の意志である。

文民統制を廃絶した今の日本は昔よりも、戦争のプロである我々に国民は任せて安心、という事なのだよ。

それでも一応、先に攻撃しないのは自衛隊の実戦部隊であるから、先手必勝なのは情報第三部と、さらに上の参謀本部の領域となる。

君達の授業の態度もいいので参謀本部も期待しているから、大いに頑張ってもらおう。机上の空論に終わらないためにも街に出て実践の足慣らし、手慣らしに行こう。」

元海一佐に伴われて地下から上がり、春日駐屯地を出た二人。正門前に見えるUR、公団団地を見て、右に直角に歩道を曲がって歩いていく。JR南福岡駅から電車に乗り、博多駅という福岡市で一番大きな駅に着く。ここから新幹線も出ている。その新幹線で中国の工作員が福岡市に、やってくる場合もある。それで元海教官は二人を新幹線乗り場の近くまで導いた。元海教官は、

「この新幹線の出入り口も要注意な場所だ。そもそも工作員が最も多い場所は東京だ。福岡市に乗り込んでくる中国の工作員は少ない。それだけに見分けは、つけやすいよ。」

と話す。

確かに新幹線の降り口から出てくる乗客に中国人らしき人影も見えない。元海教官は、

「次は地下鉄で移動する。行くぞ。」

福岡市営地下鉄は博多駅から乗れる。もちろん地下に降りて切符を買い、列車を待つ。明るい構内には中国語の案内文も見える。工作員を歓迎しているかのようで馬鹿馬鹿しい。通勤時でもないのに人は少ない。元海教官は、

「KCIAという韓国の諜報機関員も福岡市に、いるはずだが、中国ほど活動はしていない。福岡市だからだろう。」

福岡市はアジア人を歓迎している。それだけに工作員天国なのだ。

中国人の店は料理店に限らない。それには風俗業も含まれる。福岡市の風俗業は中洲という場所に大体、限定されている。これは何と江戸時代の黒田藩で決めた事だ。黒田五十二万石、筑前・黒田藩以来の伝統なのだ。

そもそも日本全国的に戦国大名の拠点地が、そのまま発展を続けている。福岡市の風俗店は、ポツンと他の場所にもあるが、広がらないで消えていく場合が多い。中州にはビルが立ち並び、その中の大半は飲食店で、それも主に酒を提供する店でスナック、パブと呼び名は色々ある。会員制のスナックもある。

これらの店も全ては生き残れず、空室も出てくる。元海教官と流太郎、釣次郎は今、中洲の飲み屋ビル街を歩いている。随分と大昔には呼び込みの連中もいたが市の条例で禁止されてからは、呼び込みは消えている。

飲み屋のビルは高くても六階程度、数十階のビルなどは昔からない。そのうちの一つのビルの一階にある店に元海教官が、

「ここに入るぞ。」

と先導した。「いらっしゃいません。」と中国語訛りの女性の声が聞こえた。中国風スナックで風水的飾り物が店内には多い。福とか赤色の配色が多数、見られる。大きな水槽に赤い金魚が数匹泳いでいた。女性店員は赤や紺色、黄色のチャイナドレスで三人が並んで立っていた。中国的美女、キャバクラのようだ。厨房に近いカウン

ター席の向こうに店の女主人が元海ら三人に気づくと、声をかけたのは、この三十代後半に見える髪の高い中国美女で、もっと若いころはキャバ嬢だったのだろう。この女店主は、

「カウンターの席に、ひと席ずつ間を開けて座ってくださいませんか。そこに、あの子たち三人を座らせます。」

と元海教官に話す。元海は、

「諸君。そのように座りなさい。」

右から元海、流太郎、釣次郎と、それぞれ一席ずつ開けて腰かける。まもなく三人の左席に、赤、紺、黄色のチャイナドレスの女性が座った。香水の甘い香りが元海ら三人の鼻を、くすぐる。元海は左に座った女性の左肩に左手を回すと、

「とりあえずビールを三人分、頼む。」

と注文すると、左の女性の肩から尻に左手を降ろし、その女性の丸い大きな臀部を、ゆったりと触る。元海は機嫌良さそうに、

「時と本池、ここは、おさわり OK なのだ。尻と胸は触っていいんだ。」

と教えた。香港から来たという店の女性たち。マダムは笑顔で、

「お二人さんも、触って大丈夫よ。この三人は彼氏も、まだ、いないし。」

流太郎と釣次郎は、しかし、手を動かさない。元海は、

「香港はアメリカの原爆は落ちないだろう。」

とマダムに聞く。マダムは、

「ええ、ダイジョブです。北京には落ちましたね。わたしたち、北京から逃げた、あるよ。にじゅ、まん死んだね。でもロサンゼルスに中国の ICBM(大陸間弾道ミサイル)に積んだ原爆、おちたよ。ハリウッドの大きな文字は、消滅したのある。」

元海は目の前に出された大ジョッキの生ビールを右手の取ると、左横にいる流太郎たちに、

「さあ、乾杯だ。(グイ、グイと一息に飲んで)、ああ。うまいな。なにせ中国から核弾頭搭載ミサイルを数百発は飛ばしたらしいね。」

「人民解放軍がシュミレーションでアメリカを攻撃する訓練をしていたら、実際の発射ボタンを押してしまったあるの。アメリカも百五十発は撃ち落としたりらしいけど五十は爆発、大惨事よ。その大惨事から第三次世界大戦、始まったアルネ。」

「もう三十年も前の話だな。日本は戦争放棄国だから、よかった。今は核攻撃なしにズルズルと続いているな、中国各地にアメリカの軍隊は入っているらしいが。」

「小さな駐留しか出来ていないわ、アメリカは。ベトナムでも結局、引き揚げたしアメリカはね、だからワタシたち中国人、漢民族負けないのあるよ。モア一杯、ビール飲む?モトウミ、サン。」

「アア、もう一杯、頼む。時君と本池クンも、お代わりに飲めよ、

生ビールをね。」

流太郎と釣次郎の隣に座っている中国人キャバ嬢も、

「ママ、わたしもビール飲みたい。」

「わたしもね、ママ。」

と声を上げた。店のママは、

「ああ、あんたたちの分は店で持つわ。はい、ジョッキで飲むあるよ。」

と二人の前に生ビールの大ジョッキを一つずつ置いた。店のママは元海の顔を覗き込むように、

「自衛隊はアメリカに協力していないあるけど、いいの?」

それに対して、胸を反りかえらせた元海は、

「日米安保条約は日本はアメリカ軍を助けなくて、いい、となっているよ。戦争に手助けすることは、戦争に参加していることになる。戦争放棄国は戦争を、しないもんだ。楽なものさ。」

中国大陸に上陸しているアメリカ軍は五十万人ほど、だ。この大部分は在韓国米軍が移動し、その後にアメリカは韓国に新しい五十万人を上陸させた。ベトナム戦争と同じく、他の国、イギリスやフランスなどは不参戦の戦いなので第三次世界大戦とは呼称しにくい戦いなのだ。

日本にとっては随分昔の朝鮮戦争と同じような雰囲気漂い、朝鮮特需があったように中国特需が発生している。なので好景気な世

の中、アメリカからに限らず中国からも日本への医薬品などの需要が出ているため、空前の好景気が日本に出現している。

日経平均も十万円を突破している。中国とアメリカの戦争は十五年を経過した。どちらの国も過去のコロナ・ウイルスで一億人以上の死者を出している国だ。コロナウイルスでは全世界の人間は十億人以上の死者が出ている。

中国としてはコロナウイルスはアメリカが持ち込んだ、と信じている人たちもいるために、手違いの核ミサイル発射も無意識的なやりタイ事をしてしまったのが本当なのかもしれない。

謂わばアメリカのコロナウイルス持ち込みの行為に対する核攻撃と見てもよいのかもしれない。

HOLLYWOOD

の文字を吹き飛ばされた恨みのせいか映画関係者の志願兵が相次いだという話が日本にも伝えられた。

流太郎の隣に座っているのが赤のチャイナドレスを着た、レンレンという北京出身の中国女性だ。彼女は流太郎に、ビールのおつまみを差し出ししながら、

「わたし、レンレンいうね。あなたも兵隊サン？」

と尋ねた。流太郎は、

「いや、ぼくは兵隊じゃないよ。ただの民間人だ。」

「そうなの？あのモトウミさんは陸上自衛隊なんですよ。」

「そうだよ。でも僕は自衛隊員じゃないんだ。」

「そうなの?じゃあ、自衛隊さんより自由なのね。」

「だろうねえ。朝からビールも飲めるし。」

「モトウミさんも飲んでる。モトウミさんは自衛隊。」

「うん、自衛隊でも特別な部隊さ。だから、いいんだろう。」

「時サン、お酒強いのね。顔も変わっていないし、あたし少し酔ってきたわ。」

レンレンは顔色を赤くしている。釣次郎の隣にいるのは黄色の服のマンマンだ。二十歳くらいで髪は肩よりも下に長い。黄色のチャイナドレスの胸は大きく、肉まんの大きなものが服の中に二つ、おいしそうに入っている感じだ。

釣次郎も大ジョッキのビールを飲んで顔色は、それほど変わらない。マンマンは、するめを釣次郎に差し出すと、

「わたし香港から北京にいた時、この店のママに誘われて日本に来ました。北京でもママは飲食店で主に飲酒する人のための店を、やってたの。福岡は、あったかくて、いいわ。香港みたい、雪は降らないし、降っても積もらないし。お金貯めて、店、出したいです。」

と話すので釣次郎は、

「日本に店を出すの、それとも中国に?」

「中国はアメリカと戦争しているから日本に店、出したい。」

「店を出すのには、お金が、たくさん要るよ。」

「わたし、ここ以外でも働いているから。」

とマンマンは髪を、かきあげながら話す。

酔いが回ってくると何の話か、いい加減になるものだ。元海教官は、

「そろそろ退店しよう。」

と二人を急(せ)き立てた。地下鉄で博多駅まで行き、地上に出て博多駅から南福岡駅へ、そこから歩いて春日駐屯地に戻ると、又、地下に降りる。そして昼食後、授業が再開された。

教壇に立った元海一佐は、

「諜報員としては外国語の習得、それも複数の言語は知らなければ、ならない。君達は正規の諜報員ではないので、深く知らなくてもいい。主に中国語は知っておこう。君達の調査する対象は中国人から、となる。女性に限らない。珍光年という中国青年がいる。日本ではホストクラブで働いているが、奴は中国の工作員だ。過去に女性防衛大臣と肉体関係を持ち、日本の国防機密を盗み出そうとした。それは随分過去の話だが、今は女性法務大臣と肉体関係に進んでいるようなんだ。